

人間の脳にとって、他人を理解するのはもっとも大切な、しかし難しい働きである。

人間は多様であり、それぞれの人が幸せになる条件も異なっている。アメリカ独立宣言や日本国憲法が「幸福追求の権利」を謳っているのは一人ひとりの求めるものが違うからで、とりわけ、建設のような公共空間に関わる仕事では多くの人の求める最大公約数をつかむのは難しい。

つまりは多様性に向き合わなくてはならないわけで、パターン認識を得意とする人間の脳でも、簡単な課題ではない。

それでも人間が一生懸命他人を理解しようとするのは、コミュニケーションをとったりチームで仕事をしたりする上でそれが欠かせないからである。

脳の中には、1990年代にイタリアの研究グループが発見した「ミラーニューロン」と呼ばれる神経細胞がある。まるで鏡に映したように、自分と他人に関する情報を関連させて処理している。ミラーニューロンを含む「ミラーシス

テム」が、人間のコミュニケーションにおいて重要な役割を果たしていると考えられている。

ミラーシステムによって支えられている他人の心を理解する働きを、「心の理論」と呼ぶ。なぜ「理論」という言葉が入っているのかと言えば、他者はその意識の状態を直接知り得ない、という意味では絶対的な「異物」でもあり、その心の状態は「理論」として推定するしかないからである。

もちろん、他人を理解する上で「共感」する能力は大切である。他人の立場になってものを考えることで、私たちはさまざまな人の気持ちに寄り添って判断することができる。一方で、共感だけで他者にアプローチするのも危険である。世の中は、ジェンダーやエスニシティ・年齢・社会的立場・経験によってさまざまな人間がおり、共感だけで理解できる範囲は限られているからである。

だからこそ、心の理論という形で、他人に対する内部モデルをつくる必要がある。自分とは違うけれども、やっぱり一生懸命生きている他者について、たとえ常に共感でき

なくても、その心の成り立ちや働きについて理解するために、心の理論が必要となる。そして脳のミラーシステムが、心の理論を生み出す上で大切な役割を果たしていると考えられている。

ところで、仕事は、世のため人のためにするものであって、自分のためにするものではない。建設のような公共空間に関わる仕事はもちろんだが、すべての仕事がそうだろう。

よく、若者と話していると、「ほく、ビッグになりますよ」と言う人がいるけれども、そのような人で実際にビッグになった例を見たことがない。

人生で陥りがちな罠は、自分が幸せになりたい、自分が成功したいと思うことである。もちろん、人間として自然な気持ちだが、しかし、そのような「利己」の精神だけでは、良い仕事をするのは難しい。人のため、世のため何かをするという「利他」の精神こそが、良い仕事をするためには必要である。

利他の方が利己よりもエネルギーが出る。世の中に自分

は一人しかいないけれども、他人はたくさんいる。自分のために、と思ってがんばろうとしても一人分のエネルギーしか出ない。他人のために、と思ってがんばれば、たくさんのエネルギーが出る。

結局、幸せになるための近道は、利他を一生懸命考えることである。世の中の人は何に困っているのか、何を求めているのか、そのような社会のありようを理解し、俯瞰することが大切になる。

その際、他人を理解するための脳回路の働きが大切になる。自分が共感できる範囲の他人のためだけに働いていると、仕事が小さくなる。自分とは異なる嗜好や背景を持つ人を含めて、世の人を広く引き受けてそのために尽力してこそ、スケールの大きな仕事ができるのである。

他人を理解するための脳回路は、熱い共感だけでなく、冷静な理論が肝心。心の理論を研ぎ澄ますためには何よりも幅広い教養が必要となる。人生経験はもちろん、小説や音楽、映画などを通して人間を知ること大切である。

(写真:業界展望を考える若手技術者の会)

特集  
行動の背景を探る

MESSAGE

## 他人を理解するためには



茂木健一郎  
MOGI Kenichiro

### プロフィール

脳科学者、作家、ブロードキャスター。ソニーコンピュータサイエンス研究所シニアリサーチャー。東京大学、日本女子大学非常勤講師。1962年東京生まれ。東京大学理学部、法学部卒業後、東京大学大学院理学系研究科物理学専攻課程修了。理学博士。理化学研究所、ケンブリッジ大学を経て現職。専門は脳科学、認知科学。「クオリア」(感覚の持つ質感)をキーワードとして脳と心の関係を研究。2005年『脳と仮想』で、第4回小林秀雄賞を受賞。2009年『今、ここからすべての場所へ』で第12回桑原武夫学芸賞を受賞。2006～2010年、NHK「プロフェッショナル仕事の流儀」キャスター。IKIGAIをテーマにした英語の著書が31カ国、29言語で翻訳出版される。主な著書に『脳とクオリア』『生きて死ぬ私』『東京藝大物語』『ベンチメント』『クオリアと人工意識』がある。